

死神のメルヘン

—グリム童話と日本の落語—

はじめに

筆者は、駿台予備学校で数学を教えているが、一方で、メルヘンやナンセンス童話の創作に取り組んでおり、いくつかの作品集を出版したりしている。読む本も、文学、芸術関係書が多いが、この分野について、個人的には、自宅で談話会を開く等はあるものの、残念ながら、教壇では、ほとんど、語る機会がない。そんな中、今回は、この貴重な紙面を利用して、メルヘンについての、筆者の最新の研究成果を披露させていただくことにしたい。今回のテーマは、グリム童話の「死神の名づけ親」と、落語「死神」の関係を中心とした、死神メルヘンの伝播であり、そこには、ナンセンス童話の精神の原初が見られるし、また、貪欲とも言えるほどの外国文化の受容という、日本文化の特徴を見ることができ、が、なによりも、従来の通説を検証することを通して、間違っ

た説が、どのようにして生まれ、どのようにして広まっていったかが明らかになってくる過程を、是非、味わっていただきたいと思っている。

北村 正裕

グリム童話「死神の名づけ親」

まず、グリム兄弟がドイツに伝わる昔話を記述して作った「グリム童話集」(決定版 一八五七年)の四四番の物語「死神の名づけ親」は、次のような話である。

貧乏な男が、子どもの名づけ親をたのむ金がなく困っていたが、名乗り出た神様を、貧富の差別をするという理由で断り、その公平ゆえに、死神を名づけ親に選ぶ。子どもが大きくなると、その名づけ親の死神が、子どもに、名医になるための秘訣を教える。死神が病人のあたまの方に立っていたら病人は助かるが、足の方に立っていたら助からないというの